自己変容に対する志向性の生涯発達¹

——自己変容への関心に着目して——

千島 雄太^{2,3} 筑波大学

Intention for self-change across the life span: Focusing on concern about self-change

Yuta Chishima (University of Tsukuba)

The purpose of the present study was to examine intention for self-change across the life span using measures of self-esteem, frequency of self-reflection, and concern about self-change. We hypothesized that: (a) Intention for self-change decreases with age because of increased self-esteem, decreased self-reflection and concern about self-change, and (b) Associations among self-esteem, frequency of self-reflection, and intention for self-change are mediated by concern about self-change. Participants ($N = 997$; age range, 15 to 69 yrs) completed an internet survey. ANOVA results suggested that intention for self-change, concern about self-change, and frequency of self-reflection decreased with age, and that self-esteem scores increased with age. Simultaneous analysis of multiple age groups showed that for all groups of low self-esteem and frequent self-reflection promoted intention for self-change and that there were significant mediating effects for concern about self-change. Therefore, these findings supported our research hypotheses.

Key words: self-change, life-span development, self-esteem, self-reflection, cross-sectional study.

The Japanese Journal of Psychology

2016, Vol. 87, No. 2, pp. 155–164

J-STAGE Advanced published date: March 10, 2016, doi.org/10.4992/jjpsy.87.15201

青年期は、主体的に自己の変化や成長に向かう「自己形成」が行われ始める時期である。すなわち、児童期までの無自覚的に行われてきた「自己発達」とは異なり、青年期になるとより自覚的・自発的に自己を形作るようになる（溝上, 2008）⁴。その中において、青年は自己の否定性への注目が高まり、それに伴って「

の自分を変えたい」といった自己の変容を望む気持ちが顕著になることが実証されている（千島, 2014; Crystal, Kato, Olson, & Watanabe, 1995; Kiecolt & Mabry, 2000; 水間, 2003; 田中, 2011）。例えば、田中（2011）や千島（2014）では、9割近くの大学生が、自己変容に対する志向性を有していることが明らかにされており、水間（2003）では、このような変容への志向性が、青年期の自己形成の営みの中で現れる態度であることが示唆されている⁵。

しかしながら、青年期的特徴を明らかにするためには、青年期以外の時期との比較によってその差異を示す必要がある。これまでほとんどの先行研究が青年期のサンプルのみを取り上げており、実際に青年期において、自己変容の志向性が顕著であるかどうかは実証されていないのが現状である。そのため本研究では、

Correspondence concerning this article should be sent to: Yuta Chishima, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan. (E-mail: chishima@human.tsukuba.ac.jp)

¹ 本研究は、平成 24 年度筑波大学研究基盤支援プログラムの助成を受けて行われた。

² 日本学術振興会特別研究員

³ 本論文の執筆にあたり、ご指導いただいた佐藤 有耕先生（筑波大学）に心より感謝申し上げます。また、研究にご協力いただいた全ての方々に、厚く御礼申し上げます。

⁴ Baltes, Reese, & Lipsitt（1980）は、児童期、青年期、成人期、老年期と経るにつれて、年齢的要因や世代文化的な要因よりも個人的要因が、人の発達に強く規定してくることを論じている。その知見を踏まえて溝上（2008）は、特に青年期以降は発達課題としてではなく、個人的な成長を志向しながら自己を作り上げていくという意味で「自己形成」という用語を使用している。

⁵ 本研究では、自己変容を「現在有している自己概念が、将来的に変わる」と定義し、自己形成によって包括される概念として位置づける。自己変容に対する志向性は、千島（2014）において、「主体的に現在の自己の変容を志す気持ち」と定義されているため、本論文においてもそれを踏襲する。

青年期以降のサンプルを含めた生涯発達の観点から検討を行う。成人期や老年期を含めた検討を行うことによって、自己の変容を志す態度が青年期以降どのように推移するのか、または青年と成人、高齢者ではどの程度異なるのかを示すことができる。このような検討によってもたらされる知見は、青年期において自己変容を望むことの役割や意味を理解する際の有用な資料となるはずである。

自己変容に対する志向性の生涯発達に関する仮説を生成する際には、発達心理学における目標調節やアイデンティティ発達の研究を概観することが有用であろう。Brandtstädter & Renner (1990)、Brandtstädter & Greve (1994)、Brandtstädter & Rothermund (1994) は、目標への対処方略として、目標に固執しそれを追求しようとする方略と、目標を達成可能な水準に柔軟に設定しなおす方略を提示し、加齢に伴って後者の方略が多く取られるようになることを明らかにしている。さらに、Ebner, Freund, & Baltes (2006) は、若者は成長に関する目標を持ちやすく、高齢者は現状維持や損失回避に関する目標を持ちやすいことを明らかにし、若者において現状維持目標は、幸福感和負の関連がある一方で、高齢者においては正の関連があることを示している。これらの結果について Ebner et al. (2006) は、生涯発達の過程において、成長から現状維持や損失回避へと目標の転換が行われ、この目標の転換によって、加齢に伴って生じる生活上の変化に適応することが可能となると説明している。また、このような発達過程は、こうありたいと思う自己像である理想自己の研究においても支持されている。例えば、Cross & Markus (1991)、Ryff (1991)、松岡 (2006) では、理想自己と現実自己のズレは、高齢になるにつれて小さくなることが明らかにされており、加齢に伴って、理想自己を実現可能な水準へと調節することや、ありのままの現実の自己を受容することによって、現実自己への肯定的評価を保っていることが指摘されている。

また、Sneed & Whitbourne (2003) は、アイデンティティ・プロセスを、経験と自己概念のズレを経験した際に、自己一貫性を維持する過程である「同化」、経験に沿って自己を変容させる過程である「調節」、自己一貫性を維持しつつ必要に応じて変える「均衡」の3点から捉え、生涯発達を検討している。年齢との関連を検討した結果、調節が年齢によって減少し、同化が年齢によって増加することを明らかにしている。同様に、Rice & Pausupathi (2010) は、自己形成への取り組みに関する語りを分析した結果、高齢者は若者よりも、自己形成への動機づけが低く、既存の自己を維持しようとする語りが多いことを明らかにしている。以上のように、高齢になるほど、それまでの目標や理想に固執することなく、自己評価を保つために自己の一貫性を維持することに動機づけられることが先行研

究から指摘されている。そのため、青年期に顕著であるとされる自己変容に対する志向性は、加齢に伴って低下することが予測される。

このような生涯発達の变化は、Carstensen (1992) によって提唱された社会情緒的選択理論からも説明が可能である。社会情緒的選択理論では、高齢者は若者よりもポジティブな情報を積極的に選択しやすく、情報の獲得や視野の拡大のような未来に向かう目標よりも、現在の幸福感に直結する目標を優先しやすいことが示されている (Carstensen, Fung, & Charles, 2003)。そのため、高齢者は、若者よりも現在の自尊感情が高く、今後の自己の変容を追求しないと考えられる。

自己変容に対する志向性に関連する変数

これまで、自己変容に対する志向性を促進する要因として、自尊感情の低さ (千島, 2014; Kiecolt & Mabry, 2000) や向上心 (田中, 2011) など様々な検討がなされてきた。自己変容に対する志向性が加齢に伴って減少する理由を解明するためには、これらの要因を同時に検討する必要がある。本研究では、その中でも先行研究において加齢による変化が示されている、自尊感情と内省頻度に着目する。Kiecolt & Mabry (2000) や千島 (2014) では自己変容に対する志向性と自尊感情の間には負の関連があることを明らかにしており、今の自分に満足できていないことが変わりたいという気持ちの背景となっていることを実証している。生涯発達に関する研究 (Orth, Maes, & Schmitt, 2015; Orth, Robins, & Widaman, 2012; Robins, Trzesniewski, Tracy, Gosling, & Potter, 2002) においては、自尊感情は、青年期から成人期にかけて増加し、60歳付近でピークを迎えることが実証されている。本邦では、小塩・岡田・茂垣・並川・脇田 (2014) が、メタ分析によって、日本人においても大学生に比べて成人や高齢者は自尊感情が高く、中学生や高校生は低い傾向があることを明らかにしている。

また、水間 (2003) では、自己変容に対する志向性と内省の間に正の関連が示されており、自己の問題に向き合えることが変容を志向する際の前提となるとしている。内省に関する生涯発達の知見は少ないものの、Sütterlin, Paap, Babic, Kübler, & Vögele (2012) では、63歳以上の高齢者は、他の年代の者と比べて自己内省が少ないことが明らかにされている。

媒介変数としての自己変容への関心

自尊感情の低さと内省頻度が自己変容に対する志向性を促進することは前述の通りであるが、なぜそのような関連が生じるのかということは、これまで推測の域を出ていなかった。すなわち、自尊感情が低い者全員が必ずしも変わりたいと思うわけではなく (水間, 2003)、同様に自己内省を頻繁に行うことが変容を望

む気持ちに直結するとは限らない。先行研究においては、自己概念への関心の高さや重要性の認識の程度を考慮すべきであることが指摘されている。例えば、Moretti & Higgins (1990) では、研究者側が設定した選択肢によって、理想自己について回答させるよりも、回答者側が重要であると認識している理想自己を抽出する方が、自己評価に強く影響することを明らかにしている。同様に、Marsh (1986) では、どの領域の自己概念が重要であるかという認識が、自己評価に影響を及ぼすことを示している。これらの研究においては、自己概念の評価に影響を及ぼす要因として、「自己概念」への関心・重要性の認識が取り上げられている。これらの文脈を参考とするならば、自己変容に対する志向性に関しても、今後自分がどのように変わっていくかという「自己概念の変容」への関心度や重要性の認識が深く関わっていると考えられる。また、自尊感情が低い場合や内省頻度が高い場合には、今後自分が変わることについて関心や重要性の認識を持ちやすいと考えられる。

そこで本研究では、自尊感情と内省頻度と自己変容に対する志向性の関連性を説明する変数として、「自己変容への関心」を取り上げる。本研究では自己変容への関心を、「現在有している自己概念が将来的に変わることに対して興味・関心を有し、その重要性を認知していること」と定義する。本研究は自己概念の領域について扱わないが、理解を促進するために、ここでは「人見知りな自分」を例に媒介モデルの説明を行う。現在の人見知りな自分に不満があり(自尊感情)、そのような自分について振り返ることが多い(内省頻度)場合、今後自分が社会的に変わっていくことへの関心(自己変容への関心)がもたらされ、人見知りを克服しようとする気持ちが高まる(自己変容に対する志向性)のではないかと考えられる。媒介変数として自己変容への関心を設定することで、これまで不明瞭であった関連を説明し、自己変容に対する志向性が促進または抑制されるプロセスを具体的に明らかにすることが可能となる。

さらに、生涯を通じて自己変容への関心の媒介効果が示されるかどうかについても検討を行う。Cross & Markus (1991) や Hooker (1992) では、高齢者は若者に比べて、理想自己の記述数が少なく、理想自己に関して考える時間が少ないことが示されており、自己変容への関心は加齢とともに低下すると予測される。媒介効果を検討することによって、なぜ自己変容に対する志向性が青年期以降に低下するのかを具体的に説明することが可能となる。すなわち、変容を志す気持ちが低下する背景として、今後の自分が変わっていくことについての関心が薄れることが想定される。これは、加齢によって自尊感情が高まることや、内省頻度が減少することよりも、志向性の低下に影響すると考

えられる。

本研究の目的と仮説

本研究の目的は、自己変容に対する志向性の生涯発達について、自尊感情、内省頻度との関連を踏まえながら明らかにすることである。以下に、本研究で検証する二つの仮説を示す。第一に、加齢による自尊感情の増加と、内省頻度や自己変容への関心の減少に伴って、自己変容に対する志向性は低下する(仮説1)。第二に、自尊感情と内省頻度が自己変容に対する志向性に及ぼす影響は、自己変容への関心によって媒介される(仮説2)。

方 法

手続きと調査対象者

インターネット調査会社であるクロス・マーケティング株式会社が保有するモニターを対象に、クローズ型ウェブ調査を実施した。調査は、3回に渡って行われ、第1回は、2013年1月に22—35歳を対象に行われた。第2回は、2013年12月に35—69歳を対象に行われた。第3回は、2015年2月に15—24歳を対象に行われた。3回の調査の実施年は異なるものの、調査の実施月はある程度同じになるよう配慮した。中学生は高校生や大学生に比べて、自己変容をあまり予期しておらず関心の弱さが窺えること(千島, 2015)や、内省水準が浅く自己を客観視しにくいこと(高坂, 2011)を踏まえて、高校生以上(15歳以上)を対象者に設定した。本研究では生涯発達を明らかにすることを目的としているため、3回のデータを合わせて分析を行うこととした。なお、調査は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た上で行われた。

得られたデータのうち、5件法の質問の80%以上で同じ数字を選択していた94名については、回答意欲がないとみなして分析から除外した。また、年代間の連続性を担保するために、以下のスクリーニングを行った。第一に、高校生には卒業後の希望進路を尋ねる選択肢として、(a) 大学・短期大学・専門学校への進学希望、(b) 就職希望、(c) その他の三つを設け、進学希望者のみを調査対象とした。第二に、大学生は、大学(6年制を含む)・短期大学・専門学校のいずれかに在籍している者のみを対象とした。その中でも、86%が大学に在籍していたため、本研究では便宜的に「大学生」と呼ぶ。第三に、20—60代は、大学・短期大学・専門学校のいずれかを卒業した者のみを調査対象とした。以上の手続きを経て、最終的に分析に用いた調査対象者は997名(男性484名、女性513名、平均年齢33.66歳、 $SD = 14.57$)であった。Table 1に、調査対象者の内訳を年代と職種ごとに示した。

Table 1
調査対象者の内訳

	高校生 15—18 歳	大学生 18—24 歳	20 代 22—29 歳	30 代 30—39 歳	40 代 40—49 歳	50 代 50—59 歳	60 代 60—69 歳	合計
学生	145 (82)	146 (72)	0	0	0	0	0	291 (154)
常勤職	0	0	109 (52)	156 (51)	57 (18)	46 (13)	28 (8)	396 (142)
非常勤職	0	0	26 (15)	27 (18)	14 (12)	13 (12)	9 (6)	89 (63)
専業主婦	0	0	16 (16)	52 (52)	14 (14)	21 (21)	22 (22)	125 (125)
無職	0	0	16 (5)	16 (3)	5 (3)	11 (4)	32 (5)	80 (20)
その他	0	0	5 (4)	2 (0)	1 (0)	7 (4)	1 (1)	16 (9)
合計	145 (82)	146 (72)	172 (92)	253 (124)	91 (47)	98 (54)	92 (42)	997 (513)

注 1) 括弧内の数字は、女性の人数を表している。

注 2) 大学生には、短期大学生・専門学校生も含まれている。

注 3) 20—60 代は、全員が大学・短期大学・専門学校のいずれかを卒業した者である。

調査内容

自己変容に対する志向性 千島 (2015) で作成された尺度を使用した。「今の自分を変えたい」、「自分は変わらなければならないと感じている」、「このままの自分でいたい」、「何としてでも変わりたいと思う」、「無理に自分を変えなくてもいいと思う」の 5 項目である。

自己変容への関心 「今の自分が変わることにについて、関心がある」、「今後の自分の変化に興味がある」、「これから自分がどう変わるかは、自分にとって重要な」の 3 項目を作成した。

自尊感情 Rosenberg (1965) で作成され、山本・松井・山成 (1982) によって翻訳された尺度を使用した。なお、第 8 項目は他の項目と比べて、著しく共通性が低いことが指摘されているため、本研究においても、第 8 項目の「もっと自分自身を尊敬できるようにしたい」を除外した 9 項目を使用した。

内省頻度 佐藤・落合 (1995) で作成された内省尺度のうち、「自己を振り返る機会の程度」の下位尺度である 5 項目を使用した。

これらの項目について、「以下の項目は、現在のあなたにどの程度あてはまりますか？もっともあてはまると思うものを、選択してください」と教示し、「1. まったくあてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. とてもよくあてはまる」の 5 件法による回答を求めた。

結 果

事前分析

各尺度の α 係数を算出したところ、自己変容に対する志向性で .87 (年代順に .82, .85, .88, .84, .89, .89, .90)、自己変容への関心で .89 (年代順に .87, .85, .87, .88, .88, .89, .89)、自尊感情で .90 (年代順に .85, .87,

Table 2
年齢と各変数の回帰分析

	年齢	年齢の二乗
自己変容に対する志向性	-.30 ***	-.32 ***
自己変容への関心	-.30 ***	-.31 ***
自尊感情	.30 ***	.31 ***
内省頻度	-.12 ***	-.12 ***

*** $p < .001$

.91, .90, .90, .86, .87)、内省頻度で .75 (年代順に .76, .75, .77, .71, .79, .64, .80) であり、一定の内的整合性が確認された。そのため、それぞれの変数で項目の加算平均を算出し、得点化を行った。

20 代以降のデータに関して、職種による差を検討するため、分散分析によって各得点の比較を行った。職種の分析の際には、「その他」を除外した。その結果、自己変容に対する志向性で有意差が示され ($F = 3.87$, $df = 3, 686$, $p < .01$, $\eta^2 = .02$)、多重比較の結果、非常勤職の者は専業主婦の者に比べて、得点が高かった。さらに、自己変容への関心で有意差が示され ($F = 4.53$, $df = 3, 686$, $p < .01$, $\eta^2 = .02$)、無職の者は常勤職や非常勤職の者に比べて、得点が低かった。自尊感情と内省頻度では、有意差が示されなかった (順に、 $F = 2.50$, $df = 3, 686$, ns , $\eta^2 = .01$; $F = 1.06$, $df = 3, 686$, ns , $\eta^2 = .00$)。

年代・性別ごとの比較

まず、年齢と各得点の関係を検討するため、年齢 (直線) と年齢の二乗 (二次曲線) を独立変数とした回帰分析を行った (Table 2)。その結果、自己変容に対する志向性、自己変容への関心、自尊感情で、二次曲線の係数の方が高く、以上の変数は年齢によって曲線的に推移することが明らかになった。そこで、以降は年代ごとに群分けして分析を行うこととした。年代ごと

Table 3
本研究で使変数間の変数間の年代ごとの相関係数

	全体			高校生			大学生		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1. 自己変容に対する志向性	—			—			—		
2. 自己変容への関心	.66 ***	—		.57 ***	—		.59 ***	—	
3. 自尊感情	-.49 ***	-.28 **	—	-.45 ***	-.09	—	-.31 ***	-.09	—
4. 内省頻度	.27 ***	.41 ***	-.18 ***	.27 **	.44 ***	-.14	.11	.31 ***	-.13
	20代			30代			40代		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
1. 自己変容に対する志向性	—			—			—		
2. 自己変容への関心	.66 ***	—		.59 ***	—		.74 ***	—	
3. 自尊感情	-.43 ***	-.35 ***	—	-.44 ***	-.16 *	—	-.53 ***	-.35 **	—
4. 内省頻度	.33 ***	.41 ***	-.24 **	.29 ***	.40 ***	-.11	.33 **	.44 ***	-.26 *
	50代			60代					
	1	2	3	1	2	3			
1. 自己変容に対する志向性	—			—					
2. 自己変容への関心	.67 ***	—		.63 ***	—				
3. 自尊感情	-.48 ***	-.28 **	—	-.53 ***	-.21 *	—			
4. 内省頻度	.14	.42 ***	-.01	.28 **	.38 ***	-.19			

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

の各変数の相関係数を Table 3 に示した。

年代と性別を要因とし、各得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った (Table 4)。その結果、全ての変数で、年代の主効果が有意であった。多重比較の結果、自己変容に対する志向性は、50代で30代以下よりも低く、60代で全ての年代よりも低かった。自己変容への関心は、40代で大学生以下よりも低く、50代で30代以下よりも低く、60代で全ての年代よりも

低かった。自尊感情は、50代で30代以下よりも高く、60代で40代以下よりも高かった。内省頻度は、年代による主効果は大きくないものの、大学生で50代や60代よりも得点が高いことが示された。内省頻度では、性別の主効果が有意であり、女性の方が男性よりも得点が高かった。交互作用は、いずれの変数においても有意ではなかった。年代による効果が特に大きかったため、年代ごとの各得点の推移を Figure 1 に図

Figure 1. 年代ごとの各得点の推移。

Table 4
年代と性別を要因とした各得点の 2 要因分散分析結果

		自己変容に対する志向性		自己変容への関心		自尊感情		内省頻度	
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
年代	1. 高校生	3.17 (0.89)	3.41 (0.79)	3.75 (0.91)	3.83 (0.85)	3.08 (0.71)	2.75 (0.77)	3.46 (0.70)	3.82 (0.66)
	2. 大学生	3.34 (0.92)	3.17 (0.77)	3.81 (0.89)	3.69 (0.92)	3.00 (0.84)	2.84 (0.72)	3.77 (0.71)	3.84 (0.67)
	3. 20 代	3.38 (1.04)	3.27 (0.73)	3.65 (0.99)	3.68 (0.80)	2.97 (0.92)	2.86 (0.73)	3.60 (0.72)	3.62 (0.67)
	4. 30 代	3.29 (0.87)	3.16 (0.76)	3.56 (0.95)	3.70 (0.79)	3.05 (0.93)	3.06 (0.68)	3.55 (0.66)	3.74 (0.59)
	5. 40 代	3.09 (0.85)	3.08 (0.86)	3.35 (1.03)	3.42 (0.97)	3.12 (0.84)	3.19 (0.81)	3.45 (0.59)	3.83 (0.74)
	6. 50 代	2.92 (1.00)	2.89 (0.70)	3.22 (1.02)	3.31 (0.67)	3.51 (0.68)	3.35 (0.66)	3.54 (0.60)	3.48 (0.53)
	7. 60 代	2.37 (0.79)	2.19 (0.79)	2.76 (0.92)	2.82 (0.85)	3.64 (0.57)	3.79 (0.62)	3.43 (0.62)	3.48 (0.76)
年代の 主効果	F 値	20.11 ***		16.95 ***		17.21 ***		3.41 **	
	$df=6, 983$	6<1,2,3,4 7<1,2,3,4,5,6		5<1,2; 6<1,2,3,4 7<1,2,3,4,5,6		1,2,3,4<6 1,2,3,4,5<7		6,7<2	
	η^2	.11		.09		.09		.02	
性別の 主効果	F 値	0.99		0.64		2.08		10.37 **	
	$df=1, 983$							男性<女性	
交互作用	η^2	.00		.00		.00		.01	
	F 値	1.06		0.37		1.34		1.87	
	$df=6, 983$								
	η^2	.01		.00		.01		.01	

注) 多重比較 (Bonferroni 法, 5% 水準) の結果を, F 値の下段に示した。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

示した。

多母集団同時分析による媒介モデルの検討

自尊感情と内省頻度から自己変容に対する志向性への関連に加えて, それらの関連を媒介する変数として, 自己変容への関心を配置したモデルを構成し, 年代ごとに多母集団同時分析を行った (Figure 2)。その際, モデルの適合性を正確にするため, 自尊感情, 内省頻度, 自己変容に対する志向性の項目に関しては, 小包化によって複数の項目を下位次元にまとめ, 潜在変数を作成した。小包化には, (a) 個々の項目を投入するよりも尺度の信頼性が確保されること, (b) 観測変数の分布が正規分布に近づくため, 最尤法推定による構造方程式モデリングに適していること, (c) 観測変数の数に対するサンプルサイズの比が高くなり, 推定が安定することなどの利点が指摘されている (星野・岡田・前田, 2005)。本研究の小包化の手続きには,

Coffman & MacCallum (2005) で推奨されている領域再現法を採用した。領域再現法とは, 因子パターン順を手掛かりに, 因子パターンが最も高い項目と最も低い項目, 二番目に高い項目と二番目に低い項目という組み合わせで, 小包を作成する方法である。自己変容に対する志向性と内省頻度は 5 項目であったため, 三つの小包を作成した。自尊感情に関しては, 清水・山本 (2008) で二つの小包の適合度が五つの場合よりもよく, 二つの小包を作成することが推奨されているため, 本研究もそれに倣った。

また, モデルの構造や係数が年代間で同一であるかどうかを確かめるために, モデルの比較を行った。分析に際して, 等値制約を施さないモデル 1, 各因子における因子負荷量と誤差分散に等値制約を施したモデル 2, モデル 2 の条件に加えて, 潜在因子間のパス係数と共分散に等値制約を施したモデル 3 の三つのモデルを設け, 適合度を算出した (Table 5)。AIC をモデ

Table 5
多母集団同時分析におけるモデル適合度

	χ^2	df	χ^2 / df	CFI	RMSEA	AIC
モデル 1	548.45 ***	203	2.70	.94	.04	912.45
モデル 2	717.25 ***	311	2.31	.93	.04	865.25
モデル 3	759.64 ***	347	2.19	.93	.04	835.64

注) モデル 1: 等値制約なし; モデル 2: 各因子の因子負荷量, 誤差分散に等値制約; モデル 3: モデル 2 + 潜在因子間のパス, 共分散に等値制約。

*** $p < .001$

ルの選択基準としたところ, モデル 3 の適合度が最も良かったため, モデル 3 を採択した。

次に, 自己変容への関心の間接効果を検討するため, ブートストラップ法 (Efron & Tibshirani, 1993) を用いて, 間接効果の 95% 信頼区間を推定した。使用した標本数は, 5,000 であった。その結果, 全ての年代において自尊感情と内省から自己変容に対する志向性への直接効果が, 自己変容への関心を媒介することで減衰し, 有意な間接効果が示された (Table 6)。

考 察

本研究の目的は, 自己変容に対する志向性の生涯発達について, 自尊感情, 内省頻度, 自己変容への関心との関連を踏まえながら明らかにすることであった。

職種・性別による差異

非常勤職の者は専業主婦の者に比べて, 自己変容に

対する志向性の得点が高かった。さらに, 無職の者は常勤職や非常勤職の者に比べて, 自己変容への関心の得点が低かった。非常勤職や無職の者は社会的地位や収入が比較的低いことが一つの要因として考えられるが, 年代ごとに得点を比較した結果を踏まえれば, これらの職種による差異は, 各職種の年齢分布に起因するものが大きいと推察される。すなわち, 非常勤職には若者の割合が多いために自己変容への志向性が高く, 無職には高齢者の割合が多いために関心が薄いと考えられる。

内省頻度では, 性別の主効果が有意であり, 女性の方が男性よりも得点が高かった。これは, Scheier & Carver (1985) や菅原 (1984) と同様の結果であり, 先行研究と一貫した結果が得られた。また, 自尊感情では, 性別で有意差が示されなかった。自尊感情については男性の方が女性よりも高いという報告が一般的であるものの, 性別による有意差は見られず, 効果は

Figure 2. 多母集団同時分析で検討された媒介モデル。

Table 6
モデル 3 における標準化推定値

		高校生	大学生	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	p
因子共分散	a ⇔ b (1)	-.13	-.13	-.13	-.14	-.13	-.19	-.18	***
	a ⇔ b (2)	-.14	-.14	-.14	-.15	-.14	-.20	-.20	***
	a → c	-.17	-.17	-.18	-.18	-.18	-.15	-.13	***
	b → c	.49	.48	.48	.45	.48	.43	.47	***
	c → d	.66	.65	.65	.64	.65	.66	.68	***
パス係数	a → d (1)	-.45	-.46	-.47	-.47	-.47	-.40	-.36	***
	a → d (2)	-.34	-.34	-.35	-.35	-.35	-.30	-.27	***
	a → d (3)	-.11	-.11	-.12	-.12	-.12	-.10	-.09	**
	b → d (1)	.27	.27	.27	.25	.26	.24	.27	***
	b → d (2)	-.05	-.04	-.04	-.04	-.04	-.04	-.05	
	b → d (3)	.32	.31	.31	.29	.31	.28	.32	***
	c	.29	.28	.29	.26	.29	.23	.27	***
	d (1)	.31	.31	.32	.31	.32	.25	.24	***
	d (2)	.62	.62	.63	.62	.63	.59	.58	***

注) a: 自尊感情, b: 内省頻度, c: 自己変容への関心, d: 自己変容に対する志向性, (1) 媒介変数投入前の推定値, (2) 投入後の推定値, (3) 間接効果。

** $p < .01$, *** $p < .001$

極めて小さいという報告 (Orth et al., 2015) も見られる。Kling, Hyde, Showers, & Buswell (1999) では、若者の方が中年や高齢者よりも自尊感情の性差が大きいことが示されているが、本研究においても、20 代までは男性の得点が女性の得点を上回っており、同様の結果となったといえる。

年齢・年代による差異

全ての変数で年齢との関係は、二次曲線のあてはまりが良く、得点は年齢によって曲線的に推移することが示された。先行研究では、自尊感情と年齢は二次曲線のあてはまりがよいことが示されている (Kling et al., 1999; Orth, Trzesniewski, & Robins, 2010; Orth et al., 2012; Orth et al., 2015) が、自己変容に対する志向性や関心は、年齢と負の二次曲線の関係にあり、予測通り年代が上がるにつれて低くなることが示された。

自尊感情については、年代が上がるにつれて高くなることが示された。自尊感情は 60 代付近でピークを迎えるとされており (Orth et al., 2012; Orth et al., 2015; Robins et al., 2002), 先行研究を支持した結果となった。内省頻度については、年代による主効果は大きくないものの、大学生で 50 代や 60 代よりも得点が高いことが示され、Sütterlin et al. (2012) と同様の結果となった。

変数間の相関を見ると、生涯を通じて自己変容に対する志向性は、自尊感情と負の関連を示し、内省頻度と自己変容への関心とは正の関連を示した。しかし、一部の年代では内省頻度との関連が有意でなく、パス解析においても媒介変数を投入した場合、その関連は

有意でなくなった。これらの結果を総合すると、加齢による自尊感情の増加と内省頻度の減少に伴って、自己変容に対する志向性と関心は低下するという仮説 1 は概ね支持された。特に、自尊感情と自己変容への関心が自己変容に対する志向性に強く影響を及ぼしていることが示唆された。

自己変容への関心の媒介効果

自己変容への関心の間接効果は有意であり、自尊感情と内省頻度から自己変容に対する志向性へのパスを媒介する変数として機能していることが示された。ここから、仮説 2 は支持された。特に、内省頻度における間接効果が大きく、自己変容への関心を投入することで、内省頻度から自己変容に対する志向性へのパスは有意でなくなった。この結果は、先行研究において、内省の頻度と志向性が関連するという結果を、実証的に説明するものであると考えられる。すなわち、これまでの自分自身について度々振り返ることが、これからの自分の変化への関心をもたらし、それに伴って自分を変えたいという気持ちが促進されるというものである。以上のようなこれまで不明瞭であった関連について、自己変容への関心を媒介させることで、プロセスを説明することが可能となった。

また、これらの変数の関連については年代間で等値制約を施したモデルがより適合しており、自己変容に対する志向性が促進・抑制されるプロセスは生涯を通じて一貫していることが明らかにされた。松岡 (2006) において、理想自己と現実自己のズレは年代ごとに減

少するが、どの年代においてもそのズレが自尊感情と負の関連を示すことが明らかにされている。本研究においても同様に、年代間で得点の差は大きいものの、変数間の関連には年代で相違がないことが明らかにされた。特に、自己変容への関心と志向性の関連が生涯を通じて高いことから、自己変容に対する志向性が増加するとともに低下するのは、今後の自分の変化について関心が薄れていくことが大きく影響していると示唆された。

本研究の結論

本研究では、自己変容に対する志向性は加齢に伴って低下し、それは自尊感情の上昇や自己変容への関心の低下と関連していることが明らかにされた。また、自尊感情と内省頻度が自己変容に対する志向性に及ぼす影響は、自己変容への関心によって媒介され、その効果は年代にかかわらず見られることが明らかにされた。

限界と今後の課題

本研究では、15歳の高校生から69歳の高齢者までを対象に、自己変容への志向性の発達を検討したが、小学生や中学生にあたる年齢群は比較的自尊感情が高いことや、70代以降の高齢者の自尊感情は低いことが明らかにされている(Orth et al., 2012; Orth et al., 2015; Robins et al., 2002)。そのため、自己変容への意識の生涯発達を検討する際にも、児童期や老年期まで対象を広げて検討する必要がある。また、本研究では大学・短大・専門学校に進学を希望しない者、在籍していない者、過去に在籍していなかった者を対象に含めなかったため、比較的教育水準が高い者が対象となった可能性が高く、知見の一般化には注意する必要がある。

また、ウェブ調査による検討であった点にも注意が必要である。インターネットを介して調査を行う研究とインターネットを用いない伝統的な方法による研究をレビューしたGosling, Vazire, Srivastava, & John (2004)では、自尊感情やパーソナリティの生涯発達に関する知見は、どちらの調査方法においても概ね一貫していることが示されている。本研究で得られた知見についても、自尊感情に関しては小塩他(2014)によるメタ分析の結果と同様の結果が得られた。しかしながら、本調査は調査会社のモニターに登録している者を対象としたクローズ型のウェブ調査であるため、一般のサンプルとはインターネットへのアクセシビリティや調査への動機づけが異なる可能性が考えられる。そのため、今後は、自己変容に関する変数について、ウェブ調査以外の方法で同様の知見が得られるかどうか、検討する必要がある。

さらに、本研究は横断的研究であり、個人間の比較

に留まっていることが限界として挙げられる。すなわち、個人内の変化やコホートの効果については検討できていない。今後、異なる年代における縦断調査によって生涯発達を検討する手法(Orth et al., 2010)などを参考にして、個人内変化に着目した発達過程を探求すべきであろう。

最後に、本研究では自己変容に対する志向性の発達を、自尊感情、内省頻度、自己変容への関心によって説明することを試みたが、これらの変数は全て内的かつ主観的な変数である。そのため、なぜ加齢によって得点が増えるかについて、異なる観点からも詳細に検討する必要がある。例えば、Wagner, Lang, Neyer, & Wagner (2014)は自尊感情のリソースに着目しており、若者にとっては、教育水準の高さ、パートナーの存在などが自尊感情のリソースになる一方で、高齢者にとっては主観的健康度が良いことが自尊感情のリソースになることを明らかにしている。今後、このような外的・客観的な観点から多角的に発達の変化を説明することが重要である。

引用文献

- Baltes, E. B., Reese, H. W., & Lipsitt, L. E. (1980). Life-span developmental psychology. *Annual Review of Psychology*, 31, 65–110.
- Brandtstädter, J., & Greve, W. (1994). The aging self: Stabilizing and protective processes. *Developmental Review*, 14, 52–80.
- Brandtstädter, J., & Renner, G. (1990). Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment: Explication and age-related analysis of assimilative and accommodative strategies of coping. *Psychology and Aging*, 5, 58–67.
- Brandtstädter, J., & Rothermund, K. (1994). Self-percepts of control in middle and later adulthood: Buffering losses by rescaling goals. *Psychology and Aging*, 9, 265–273.
- Carstensen, L. L. (1992). Social and emotional patterns in adulthood: Support for socioemotional selectivity theory. *Psychology and Aging*, 7, 331–338.
- Carstensen, L. L., Fung, H., & Charles, S. (2003). Socioemotional selectivity theory and the regulation of emotion in the second half of life. *Motivation and Emotion*, 27, 103–123.
- 千島 雄太 (2014). 大学生における自己変容に対する志向性の諸側面——人格発達、心理的適応との関連に着目して—— 青年心理学研究, 25, 85–103.
- 千島 雄太 (2015). 青年期における自己変容のメリット・デメリット予期に伴う葛藤——学校段階による比較—— 発達心理学研究, 26, 1–12.
- Coffman, D. L., & MacCallum, R. C. (2005). Using parcels to convert path analysis models into latent variable models. *Multivariate Behavioral Research*, 40, 235–259.
- Cross, S. E., & Markus, H. (1991). Possible selves across

- the life-span. *Human Development*, 34, 230–255.
- Crystal, D., Kato, K., Olson, S., & Watanabe, H. (1995). Attitudes towards self-change: A comparison of Japanese and American university students. *International Journal of Behavioral Development*, 18, 577–593.
- Ebner, N. C., Freund, A. M., & Baltes, P. B. (2006). Developmental changes in personal goal orientation from young to late adulthood: From striving for gains to maintenance and prevention of losses. *Psychology and Aging*, 21, 664–678.
- Efron, B., & Tibshirani, R. (1993). *An introduction to the bootstrap*. New York: Chapman and Hall.
- Gosling, S. D., Vazire, S., Srivastava, S., & John, O. P. (2004). Should we trust web-based studies?: A comparative analysis of six preconceptions about Internet questionnaires. *American Psychologist*, 59, 93–104.
- Hooker, K. (1992). Possible selves and perceived health in older adults and college students. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 47, 85–95.
- 星野 崇宏・岡田 謙介・前田 忠彦 (2005). 構造方程式モデリングにおける適合度指標とモデル改善について——展望とシミュレーション研究による新たな知見—— 行動計量学, 32, 209–235.
- Kiecolt, K. J., & Mabry, J. B. (2000). Agency in young adulthood: Intentional self-change among college students. *Advances in Life Course Research*, 5, 181–205.
- Kling, K. C., Hyde, J. S., Showers, C. J., & Buswell, B. N. (1999). Gender differences in self-esteem: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 125, 470–500.
- 高坂 康雅 (2011). 青年期における内省への取り組み方の発達の変化と劣等感との関連 青年心理学研究, 21, 83–94.
- Marsh, H. W. (1986). Global self-esteem: Its relation to specific facets of self-concept and their importance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1224–1236.
- 松岡 弥玲 (2006). 理想自己の生涯発達——変化の意味と調節過程を捉える—— 教育心理学研究, 54, 45–54.
- 溝上 慎一 (2008). 自己形成の心理学——他者の森をかけ抜けて自己になる—— 世界思想社
- 水間 玲子 (2003). 自己嫌悪感と自己形成の関係について——自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して—— 教育心理学研究, 51, 43–53.
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. (1990). Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual self-ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108–123.
- Orth, U., Maes, J., & Schmitt, M. (2015). Self-esteem development across the life span: A longitudinal study with a large sample from Germany. *Developmental Psychology*, 51, 248–259.
- Orth, U., Robins, R. W., & Widaman, K. F. (2012). Life-span development of self-esteem and its effects on important life outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 102, 1271–1288.
- Orth, U., Trzesniewski, K. H., & Robins, R. W. (2010). Self-esteem development from young adulthood to old age: A cohort-sequential longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 645–658.
- 小塩 真司・岡田 涼・茂垣 まどか・並川 努・脇田 貴文 (2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響——Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析—— 教育心理学研究, 62, 273–282.
- Rice, C., & Pausupathi, M. (2010). Reflecting on self-relevant experiences: Adult age differences. *Developmental Psychology*, 46, 479–490.
- Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Tracy, J. L., Gosling, S. D., & Potter, J. (2002). Global self-esteem across the lifespan. *Psychology and Aging*, 17, 423–434.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Ryff, C. D. (1991). Possible selves in adulthood and old age: A tale of shifting horizons. *Psychology and Aging*, 6, 286–295.
- 佐藤 有耕・落合 良行 (1995). 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, 17, 61–66.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. (1985). The self-consciousness scale: A revised version for use with general populations. *Journal of Applied Social Psychology*, 15, 687–699.
- 清水 和秋・山本 理恵 (2008). 感情的表現測定による Big Five 測定 of 半年間隔での安定性と変動——個人間差, 状態・特性不安, 自尊感情との関連—— 関西大学社会学部紀要, 39, 35–67.
- Sneed, J. R., & Whitbourne, S. K. (2003). Identity processing and self-consciousness in middle and later adulthood. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 58, 313–319.
- 菅原 健介 (1984). 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184–188.
- Sütterlin, S., Paap, M. C. S., Babic, S., Kübler, A., & Vögele, C. (2012). Rumination and age: Some things get better. *Journal of Aging Research*, 2012, 1–10. doi: 10.1155/2012/267327
- 田中 道弘 (2011). 自分が変わることに対する肯定的な捉え方の背景にあるものは何か?——自己肯定感, 向上心, 時間的展望, 特性的自己効力感の視点から—— マイクロカウンセリング研究, 6, 12–23.
- Wagner, J., Lang, F. R., Neyer, F. J., & Wagner, G. G. (2014). Self-esteem across adulthood: The role of resources. *European Journal of Ageing*, 11, 109–119.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64–68.